

# 二〇一一年度大学入試センター試験 解説 〈古典〉

## 第3問 古文 『保元物語』

### 〔通釈〕

左馬頭「源義朝」は、あれこれと物も言わず、涙をはらはらと流して、「それなら、おまえが、よいように取りはからい申せ」とおっしゃった。正清「鎌田正清」が、「そのようにおっしゃいますならば、（お父上に）御対面しまして、（御氣持ちを）なだめ申し上げなさいませ」と申し上げたところ、（左馬頭は）流れる涙を押しぬぐって、何気ないふりをして、入道「源為義」の御前に参上し、「私義朝は、今度の合戦の大将として、忠義の働きをいたしました。何人もの若い者たちが討死にし、負傷いたしました。それなのに、いまだ勲功の賞もいただいておりませんところに、（父上の）御首を刎ねて差し出し申し上げよと、度々御命令が下されましたので、このたびの忠義の恩賞に引き替え申し上げて、（父上の）御命だけでも願ひ申し上げてお助けするのでございます。ただし、平清盛は、たいした忠功もございませんのに、大國をたくさん賜わり、（その）一族は朝廷からの恩賞を誇っております。私義朝などは、とても（清盛に）まさりようありません。そのうえ、（父上が）このままいらっしゃいましたら、石の中の蜘蛛とか言うように身動きがとれないと思われます。人の口はうるさいものでございますから、どのような讒言が出て来ることでございましょうか（わかったものではございません）。東山のある場所に、庵室を作つて持つております。素晴らしい所でございますから、そちらにお移りになりまして、静かに御念仏でも唱えてお過ぎなさいませよ」と申し上げなされたところ、入道は、まず涙をはらはらとこぼして、「ああ、人間の宝として、子にまさるものはないのだなあ。子でなような者なら、誰がこのように我が身に替えて（私の）命を助けてくれるだろうか（助けてはくれはしない）。何度生まれ変わら幾世を経てもこの恩は忘れないだろうよ」と、手を合わせてお喜びになる。義朝は、心中では、「氣の毒なことだなあ。たつた今斬られなされることも御存じなく、このように（喜んで）おっしゃることよ」と思つたので、さらに涙があふれるが、何気ないふりをして、「それでは、正清よ、（父上に）御輿を用意して差し上げよ」と御命じになると、（鎌田は）「承知いたしました」と答えて、白木造りの腰車を引き出す。そうは言ってもやはり、（為義は）なごり惜しいので、なかなか出立なさることができなかったが、正清が、「お早く、お早く」と申し上げるので、気が進まないまま（輿に）お乗りになる。

夜中頃のことであるので、どちらがどこと（方角）もわからないけれども、（腰車は）東の方へは行かないで、（正清は）七条西の朱雀へと（車を）引いて行く。波多野次郎は、力の強い者たちに輿をかつがせて、やって来た。鎌田は、朱雀で（為義が）腰車から輿に移りなさうとするところを討ち申し上げようと、太刀をかまえ、待ち受けていた。波多野次郎は、まだこのこと「為義を討つこと」を十分に心得ていなかったもので、鎌田の袖をつかまえ

て言うには、「やや、鎌田殿よ、これはどのような（ことをしようという）お考えか。こんなことには、まったく納得がいかない。いよいよ（為義様の）命を奪い申し上げようということであるようだ。確かに、入道殿が朝敵とおなりになったことは、どうしようもないことである。そうではあるけれども、このたび、頭殿「義朝」が大將軍（の職）をいただきなさるといふのも、誰のお陰か。（お父上である）入道殿の御威勢（のお陰）である。東国の仲間たちが大勢（義朝様に）付き従い申し上げるといふのも、また、入道殿が（義朝様に）お譲りになったからであるよ。確かに勅命でも拒みようがないとはいふものの、（頭殿が）実の父の首をどうしてお斬りになってよいものか。返す返す考えてみても残念なことであるよ。明日には世間の噂となり、（親殺しの不孝者として）人々に後ろ指を差されなさることになるであろう頭殿のひどい評判を思うとつらい。そもそも、昔、伊予殿「源頼義」が、相模守として、鎌倉にいらっしやった時は、関東八か国の武士たちで、八幡殿「源義家」を主人として頼りにしない者がいただろうか（いなかったはずだ）。その（義家様の）子でいらっしやるのだから、入道殿も我らの主人、（また）その子でいらっしやるからこそ、頭殿も（我らの）主人なのである。中でも、あなた「鎌田」は入道殿に育ての親として育てあげられ申し上げて、御縁が深い人であるよ。どうして（よく考えもせず）むやみに（入道殿を）討ち申し上げようとなさるのか。（お命を）お助けするまでは無理だとしても、せめて、こうだと（事情を）申し上げて、最後の御念仏を唱えるようにお勧め申し上げなされよ」と言ったところ、それが道理だと思つたのだろうか、鎌田は、「それならば、あなたが、その事情を（為義様に）申しあげてください」と言うので、義通「波多野」が、車の轅（なぐさ）にしがみついて、泣きながら（為義に）申し上げたのは、「まだ事態がおわかりになっていないのですか。頭殿からの御命令をお受けして、正清が斬り役として、たった今、（あなた様は）車と輿との間で討たれなさろうとしておりますというのに」と申し上げて、（波多野が）袖を顔に押し覆って、涙にむせんでうつ伏したので、入道は、たいそう驚いて、「無念なことになったようであるなあ。義朝は、さては、（私を）だましたのだな。ああ、八郎「源為朝」がしばしば言っていたのになあ。こうなるだろうとわかつていたならば、六人の子供を、前後に立てて、手持ちの矢をある限り射尽くして、討ち死にして死んだのに、そうしたら、きつと後世に名声をあげることもなかったらうに。（そうもいかず）それでは、犬死に「無駄死」することになるのだな。このたびの合戦で崇徳院方がお勝ちになったならば、お願い申し上げてどのような勲功や勲賞「恩賞」にも替えて、（私は）どうして（朝敵となる）義朝一人を助けられないことがあるか（必ず助ける）。ああ、親が子を大切に思うほどには、子は親を大切に思わないものなのだなあ。諸仏念衆生、衆生不念仏。父母常念子、子不念父母（諸仏は衆生を思うけれども、衆生は仏を念ずることをしない。父母は常に子を大切に思うが、子は父母を大切に思わない）と、仏がお説きになっていらっしやるのは、まったく間違いがないことなのだ。ただし、このよう（に我が子義朝は親である私を殺すの）ではあるけれども、（私は）我が子「義朝」が不幸になれとはまったく思わないのだ。できることなら、上は梵天・帝釈天「ともに仏教の守護神」から、下は堅牢地神「大地を司る神」に至りなさるまで、義朝の（犯す不孝の）大罪をお許しください」と言い果てもなさらず、涙にむせびなされた。

## 〔解説〕

## 問1 語句の解釈の問題

例年の問1に比べて、傍線部の単語や文法の意味だけでなく、前後の文意を踏まえて判断する問題の比率が高かった。

## (ア) 基本

すかしまゐらせ給へ

「すかし／まゐらせ／給へ」と単語分けされる。「すかす」「すかし」は連用形)は、「だます・おだてる・なだめる」等の意を表す動詞。「まゐらす(参らす)」「まゐらせ」は連用形)は、本動詞としては「差し上げる」、補助動詞として「〜申し上げる・おしする」と訳す謙讓の動詞で、ここでは後者の謙讓の補助動詞。「給ふ」「給へ」は命令形)は、ここでは尊敬の補助動詞。「すかす」の意味はわかりにくいかもしれないが、「まゐらす」の訳が正しいのは②と④だけ。この後で義朝が父親為義に語っている内容は、「なだめ」ていると言える内容であろうから、②が正解。「すかす」の意がわかれば、さらに確実に正解できる。

## (イ) 基本

すでに失ひ奉らん

「すでに／失ひ／奉らん」と単語分けされる。「奉る」「奉ら」は未然形)は、ここでは「〜申し上げる・おしする」と訳す謙讓の補助動詞。「ん」は、推量・意志の意を表す助動詞「む(ん)」の終止形。よって、「〜奉らん」は「〜申し上げるだろう・〜申し上げよう」と訳すべき部分だが、これについては全ての選択肢が正しい。傍線部は、鎌田が為義を暗殺しようとしているところへやってきた波多野が「このこと」「暗殺」を心得ておらず、鎌田を問いただしている部分にあるので、「失ふ」は為義の命を奪うことと考えるのがよい。よって、④が正解。謙讓語(ここでは「奉る」)は動作の受け手に対する敬意を表す敬語であるから、「失ふ」の対象となる事物・人物は、この部分の話者である波多野が敬意を感じるものでなくてはならない。波多野は、主人である為義には敬意を払うであろうから、その点から「失ふ」の対象が為義である③・④・⑤に絞ることはできるが、正解するには文意を踏まえる必要がある。

## (ウ) 基本

いまだ知らせ給ひ候はずや

「いまだ／知ら／せ／給ひ／候はず／や」と単語分けされる。「す」「せ」は連用形)は、ここでは尊敬の意を表す助動詞。「給ふ」「給ひ」は連



段活用の動詞である。「いらっしやる」と訳す尊敬語の動詞には「おはす・おはします・ます・まします・います」等があることを知っておきたい。現代語での「ます」は、主に丁寧の意を表す助動詞であるので、混乱しないように注意したい。

正解 ① (5点)

24

### 問3 標準

傍線部A「涙のすすむ」とあるが、義朝がそのような状態になった理由として最も適当なものを選べ。

傍線部の理由を問う問題。

傍線部の直前にある、「と思ひければ」は「と思ったので」という意味である。已然形(ここでは「けれ」)に接続している接続助詞「ば」は確定条件を表し、「すると・したところ」「ので・から」(原因・理由)と訳す。つまり、傍線部で原因理由を問われた時には、直前の「已然形+ば」にいたる部分がその説明となつている可能性が高いのである。「と思ひければ」の直前の義朝の会話は、「気の毒なことだなあ。たつた今斬られなさることも御存じなく、このように(喜んで)おっしゃることよ」という意味である。義朝は父為義に「父上を助けます。しかし世間体もあるから、東山の庵室へ行って静かにしてください」と言つて、父を「この世に子ほど素晴らしい宝はない。来世にかけてこの恩は忘れない」と喜ばせながら、心中では殺すつもりでいたのである。第二段落を読んでいくと、義朝が鎌田に為義の暗殺を命じたことは明らかであるが、実はすでに第一段落に書かれている場面で義朝は父為義を鎌田に殺させようとしているのである。つまり、「涙のすすむ(さらに涙があふれる)」理由は、実際には殺すつもりでいるのに、父をだまして喜ばせることが気の毒でならないから、ということになる。よつて、これを説明している④が正解。なお、為義はこの時点では殺されることに気がついていないので、①の「斬られるかもしれないとためらっている」は誤り。②・③は、それぞれ前半に書かれている内容を含んでいない(③の「彼らを指揮した」は誤り)が、傍線部にいたる直接的な理由の説明になっていない。⑤は「鎌田正清の言いなりになって」とあるが、そのような事実はない。

正解 ④ (8点)

25

### 問4 難

傍線部B「理<sup>ことわり</sup>と思ひけん」の、「理」の説明として最も適当なものを選べ。

文中の語「理<sup>ことわり</sup>」の内容を問う問題。

「理」は「ことわり」と読む。「物事の道理・理屈」の意である。よって、傍線部の「理とや思ひけん」とは、「道理だと思つたのだろうか」という意味になる。これは、波多野が鎌田の袖をつかまえて言った「や、殿、これはいかなる御計らひぞし最後の御念仏をも勧め奉り給へかし」を聞いた鎌田の様子を言っているのであるから、鎌田が「理」と感じたのは、波多野の述べている内容についてである。そこで、波多野が述べていることをまとめると、「為義様の暗殺は納得できない。為義様が朝敵となったのはしかたがないが、義朝様が大将軍になったのも、大勢の武士が付き従うのも、為義様のお陰である。為義様を斬るのは勅命だからしかたがないが、子が父を斬つてよいものか。義朝様に不孝者としての悪評が立つのもつらい。伊予殿「源頼義」、八幡殿「源義家」を、皆は頼りとした。だから、その子である為義様も、またその子である義朝様も我らの主人なのだ。鎌田殿にとって為義様は育ての親であり、むやみに討つてはならない。命を助けられないまでも、せめて事情を言つて、念仏を唱えるよう勧めよ」となる。ここで波多野が言っている「御念仏をも勧め奉り給へかし」は「(為義様に) 御念仏を勧め申し上げなさいよ」という意味であるから、選択肢の最後で、鎌田や波多野が念仏を唱えるとしている①の「懇ろに後を弔つて念仏にはげむべきだ」、②の「神仏の加護があるように祈るべきだ」、⑤の「為義の極楽往生を祈る念仏を唱えてからにするべきだ」は、誤りである。また、④の「出家する意志があるかどうか確かめた後にするべきだ」は、本文に「出家」にまで言及している事実がないので正しくない。③の「最後の念仏が唱えられるように丁寧な扱ひをするべきだ」だけが、為義に念仏を「勧め」という意味を正しく説明しているのので、③が正解となる。③は、それ以外の部分も波多野の発言を正しく踏まえていて誤りがない。①の「源氏の先祖代々の働さが裏目に出て」「人目に触れないように行い」、②の「為義がはじめて東国の武士をまとめたために、鎌田正清や波多野義通たちは出世できた」、④の「方針を変えた為義のおかげで」、⑤の「人にも指をさされずに済んだ」は、いずれも波多野の発言と合致しない。

正解

26

③

(8点)

## 問5 やや難

傍線部C「かくはあれども、全く我が子悪かれとは思はぬなり」にいたる為義の心情の変化の説明として最も適当なものを選べ。

傍線部にいたる心情の変化を問う問題。

為義は、第一段落では、義朝の言葉に「涙をはらはらとこぼし」(28ページ8行目)、「手を合はせて喜び」(同10行目)、義朝との別れに「なごりの惜しけれ」(同12行目)と思うのであるが、第二段落に入り、波多野の言葉を聞くと「大きに驚き」(29ページ12行目)、「口惜しきことごさんなれ」義朝が逆罪を助けさせ給へや」と言つて「涙にむせ」(最終行)ぶのである。①～⑤の選択肢の冒頭で共通している「義朝の仕打ちに衝撃を受け」は、波多野から暗殺計画を知らされた時の「大きに驚き」がこれに相当し、選択肢の末尾で共通している「義朝の仕打ちを許した」は、傍線部の「全く我

が子悪かれとは思はぬなり」や、その後の「義朝が逆罪を助けさせ給へや」がこれに相当する。つまり、設問で問われている「しにいたる為義の心情の変化」とは、為義の会話の最後の部分の内容との合致を見ればよいのである。為義がここで述べている「諸仏念衆生、衆生不念仏。父母常念子、子不念父母」という仏の教えは、(注16)にあるように、諸仏は衆生を思うけれども、衆生は仏を念ずることをしない。父母は常に子を大切に思うが、子は父母を大切に思わない、という意味であり、その直前で言っている「親の子を思うほど、子は親を思はざりけるよ」と同内容であり、為義は、この仏の教えは「少しも違はず(少しも違っていない)」、つまり、正しかったと述べている。このことから、①の「親を思わぬ子は悪人だという仏の教え」、②の「親を思わぬ子はないという仏の教え」「誤りだったと落胆した」、③の「かつて自分が親を思っていた」は誤り。また、②の「親としては戦の場で子に冷淡にされることを受け入れなければならない」、④の「子が戦の場で勲功を立てられるなら少しも悪くはない」は、本文全体としてはそのようなことを為義が考えているような雰囲気はあるが、為義の最後の会話の部分にはそのようなことが述べられていない。④は「自分だったら命に代えても子を助けるのにと立腹した」は、為義の会話の「今度の合戦に院方勝たせ給ひたらば義朝一人を助けざるべき」に相当して誤りはないが、後半が正しくないので正解にはならない。

正解となる⑤は、まず前半の「自分の子に欺かれるぐらいなら戦って討ち死にした方がましだったと後悔した」が、為義の会話の「かくあるべしと知りたらばし名を後代にあげてまし。さては、犬死にせんずるにこそ」に相当する。反実仮想(仮定条件を受けて使われる助動詞「まし」)や、推量の助動詞「むず」「んずる」は連体形)の意味に注意して、内容を正しく把握しなければならない。また、選択肢後半の「親としては子が不幸にならないことを願いたい」は、傍線部の「我が子悪かれとは思はぬなり」に相当する。「悪かれ」とは形容詞「悪し」の命令形であるから、「我が子悪かれとは思はぬなり」とは、「我が子が悪い状態であれとは思わない」、つまり、「我が子が不幸であれとは思わない」と言っているのである。

正解 ⑤ (8点)

27

## 問6 難

この文章の表現の特徴と内容についての説明として最も適当なものを選べ。

本文の表現の特徴と内容を問う問題。

「表現の特徴」を問う問題は、近年現代文や漢文で出題された形式で、古文では二〇〇八年に「表現および文学史」の問題として出されて以来の出題となる。

①は、「為義や波多野義通の発言のなかに強意の『こそ』『ぞ』や反語の『や』が多用される」とあるが、為義の発言では多用されている事実がな

いので誤り。③は、「和漢混交文」であることに間違いはないが、四人の登場人物の行動に「常に勇ましくあろうとする武士の価値観」が表れているとは言いがたいので誤り。義朝・鎌田の行動や、波多野の発言に、主人に対する「義」を、為義の発言に、「子への思い」を読み取ることができようが、為義をだまし討ちしようとする義朝と鎌田、負けた後に義朝に助けられて喜ぶ義朝、義を感じつつも勅命やむなしとしてせめて最後の念仏を言う波多野の姿からは「常に勇ましくあろうと」しているようには見えない。④は、まず「親子の情愛がすれ違って」いるという内容が本文になく、それゆえ、その「理由が明確に示され」ていない。義朝は、勅命を優先して父を殺そうとしているのであり、父を気の毒には思っているが、情愛というほどのものが描かれてはいない。父である為義は「親は子を思うが、子は親を思わない」と言っている自分には義朝に対する情愛があるように発言しているが、この親子に「情愛がすれ違って」いる様子はない。「武士であるがゆえに最後まで譲り合えない二人の姿」も本文にはない。確かに、義朝が勅命に逆らえず父親を殺そうとしていることは「武士であるがゆえに」どうにも譲れないことであると言えるが、為義には「武士であるがゆえに」義朝に対して譲れないことはない。⑤は、「義朝の心情が会話文のなかで短く示される一方、為義の心情が地の文で詳しく説明される」が本文に反する。特に、為義の心情が地の文で述べられているのは、第一段落の「涙をはらはらとこぼし」「手を合はせて喜び」「なごりの惜しけれ」と、第二段落の「大きに驚き」「涙にむせび」であり、とても「詳しく説明」しているとは言えない。また、「武士としての為義の嘆き」も「父としての為義の嘆き」とあるべきで、正しいとは言えない。

正解となる②は、「為義や波多野義通の発言のなかに仏の教えや源氏の来歴が引用される」とあり、為義の発言の中の「諸仏念衆生々子不念父母」や、波多野の発言の中の「そもそも、昔、伊予殿頭殿も主なれ」に相当して誤りがない。後半の「二人の主張に個人的見解の域を超えた根拠が加えられ」も、「仏の教え」と「源氏の来歴」は「個人的見解を越え」ているのであるから誤りはない。また、「仏の教え」の引用は為義の「感慨を深め」ていると言ってよく、「源氏の来歴」は波多野が鎌田を「道義を重んじ」て説得しようとしているものであることに間違いはない。

こうした「表現」にかかわる問題では、説明されている表現や、それに関わる内容が、実際に本文にあるのかどうかを確かめることを優先し、表現の効果の説明の正誤について考えるのは後回しにするほうがよい。たとえば、正解である②には「生き生きと描き出されている」とあるが、その表現を「生き生きと」感じるか否かは、読者によって差もあるはずで、その正否は考えても答が出ないとも言えるのである。よって、表現の効果についての説明は置いておき、まず表現や内容の本文内における事実確認をすることが大切である。

正解

28

②

(6点)

## 第4問 漢文

黄潛『金華黄先生文集』

## 「書き下し文」

六経の学を言ふは、譬めて武丁の説に命ずるに見ゆるも、而れども学を為すの道を論じては、遜と曰ひ敏と曰ふのみ。遜とは其の謙退せんと欲して能はざる所有るがごとくするなり。敏とは其の進修せんと欲して及ばざる所有るがごとくするなり。退くは則ち虚しくして人に受け、進むは則ち勤めて以て己を励ますなり。二者は固より偏廢すべからざるなり。

孔子は大聖人なれども自らは聖とせず。故に「我生まれながらにして之を知る者に非ず」と曰ふは遜と謂ふべし。然り而して又た「古を好み、敏にして以て之を求めたる者なり」と曰ふは則ち其の之を求むるや、曷ぞ嘗て敏を貴ばざらんや。他日、顔・曾の二子と仁と孝とを言ひて、二子は皆自ら敏ならずと謂ふ。其の遜なること抑見るべし。回の仁・参の孝も、三千の徒、未だ之に先んずること或る能はず。豈に真に敏ならざる者ならんや。苟しくも徒だ自ら卑しむるを為して自ら強むる所以を思はざるは、是れ退くを知りて進むを知らずと謂ふ。蓋し遜は美德と雖も、然れども必ず敏ならば則ち功有り。是に由りて之を言はば、則ち学を為すの道、重んずる所は尤も敏に在るなり。

## 「通釈」

六経が学問について述べるのは、『書経』説命篇で、殷の武丁が傳説に徳を修める方法に答えるように命じた部分において、初めて見えるのであるが、学問の道を論ずるにあたって、傳説は「遜」と「敏」ということを言っているのみである。「遜」とは、自分は謙虚であろうとしているが、なおそれができていないようだと考えることである。「敏」とは、自分は進んで学ぼうとしているが、なおそれが不十分であるようだと考えることである。謙虚であるとは、心を素直にして人に教えることであり、進んで学ぶとは、自分にむち打って積極的に努力することである。この二つは、もとよりどちらか片方だけを捨ててよいものではないのである。

孔子は偉大なる聖人であるが、自分を聖人だとは言わなかった。それゆえ、「私は生まれながらに物事を何でも知っている人間ではない」と言っているが、(この言葉は)「遜」と言えよう。しかし、また(孔子は、先の言葉に続けて)「(私は)昔の聖人の学を好み、積極的に努力してこれを探究してきた人間なのだ」と言っているのは、そうだとすると、孔子が古の教えを追求するに当たって、どうして「敏」を貴はなかったことになろうか(いや、「敏」を貴んだということになろう)。また、以前、(孔子が)顔回と曾参の二人と、仁と孝とについて語ったとき、二人はともに、みずからは「敏」ではないと言った。その(二人の態度が)「遜」であることはむろんよしとすべきである。(しかし、実際には)顔回の「仁」であること、曾参の「孝」であることは、孔子の三千人の他の弟子たちの誰一人として追い越すことはできていない(ほどの立派なもの)のである。(自分では「敏」ではないと言っているが、

この二人は) どうして「敏」でない者であろうか、いや、真に「敏」である者というべきであろう。かりにも、ただ自分を卑下するだけで、自分をむち打って努力する方法を考えないのは、謙虚に「遜」であるだけで、積極的に努力する「敏」を知らなという(べきである)。「遜」は美德ではあるが、しかし、「敏」であれば(学問の修得の)効果は必ずある。このことからいえば、学問の道において最も重要なのは「敏」である。

〔解説〕

問1 (1)基本 (2)基本

傍線部(1)「偏」・(2)「所以」の意味として最も適当なものを、それぞれ一つずつ選べ。

語の意味の問題。

問1は、三年連続で語の意味の問題であった。二〇〇九年度は「寧歳」「相類(相類す)」、二〇一〇年度は「動(ややもすれば)」「是」である。

(1)「偏」は「偏廢」という見なれない熟語の中にあるが、字の意味としては、「偏愛」「偏見」「偏向」「偏在」「偏重」などの熟語で考えてみればわかるように、一方に片よることを言う語である。「退」と「進」、さらに傍線部Aまでさかのぼれば「遜」と「敏」の「二者」について述べている文脈にあることから見ても、「偏廢すべからざるなり」は、「片方だけ捨てることはできない」ということであろうから、正解は⑤。①～④はいずれも「偏」という字のもつ意味にそぐわない。

(2)「所以」は、受験漢文では頻出する重要単語である。一般に、「理由・わけ」の意味で出るケースで出題されることが多いが、そのほかに、「方法・手段」(例・「法令は民を導く所以なり」)、「……するところのもの」(例・「目は視る所以なり」)という訳し方がある。これらの知識があれば、選択肢の中に該当するものは、④「方法」しかないことが即断できる。「自ら強むる所以を思は」ないのは、「進むを知らず」ということだという文脈にあるが、「自ら強むる」は第一段落の「勤めて以て己を励ます」とほぼ同じ意味である。ゆえに、「所以」は「方法」でよいが、もう少し軽く、「こと」「くらいの意味でもよいところであろう。

正解 (1) 29 (2) 30 (各4点)

## 問2 標準

傍線部A「遜者欲其謙退而如有所不能。敏者欲其進修而如有所不及」の解釈として最も適当なものを選べ。

訓点のある傍線部の解釈の問題。

傍線部Aはかなり長く、なかなか難しいのであるが、この設問があることによって、この長い箇所の意味がわかるようになってきていると言ってもよい。「遜」についても、「敏」についても、「其の謙退せんと欲して」が「自分は謙虚でありたいと思う」という意味であること、「其の進修せんと欲して」が、「自分は進んで学びたい」という意味であること、全選択肢に共通していること、によってわかるからである。あとは、「能はざる所有るがごとくするなり」と「及ばざる所有るがごとくするなり」の部分の解釈をチェックしてみることになる。

まず、前半の「能はざる所有るがごとくするなり」であるが、「能はず」は不可能で、「できない」という意味である。とすると、①の「とうていそれができそうにない」、②の「なおそれができていない」がよさそうであり、⑤の「その能力が全くないようだ」も不可能ととれなくはない。③は「できそうにない」はあるのだが、「人に対抗」がよけいである。④には不可能の解釈がない。①・②・⑤を残したが、実はよくよく考えてみると、①・⑤のように、謙虚であることが「とうていできそうにない」とか、謙虚であろうとする「能力が全くない」のでは、「偏廃すべからざる」はずなのに、もはや「遜」についてはダメだということになってしまうのではなからうか。①・⑤よりも、②がよさそうである。

一方、後半の「及ばざる所有るがごとくするなり」である。前半段階で残してある①・②・⑤をチェックしてみよう。①は、「言及」ではないのだから、「言わないほうがいいようだ」は不適當であろう。②の「なお不十分であるようだ」はよさそうである。⑤は、前半の判断の最後でも言ったように、「進んで学ぼうと」する「才能が全くないようだ」では、「敏」についてはダメだということになってしまうので不適當であろう。

正解 31 ② (7点)

## 問3 やや難

傍線部B「則其求之也、曷嘗不貴於敏乎」について、(i)書き下し文・(ii)その解釈として最も適当なものを、それぞれ一つずつ選べ。

傍線部の書き下し文と解釈の問題。

「曷・乎」の句法があつて、そこで絞れそうかと思つて選択肢を見ると絞れないことがすぐにわかる。なかなか面倒な問題で、傍線部に至る文脈が

ら考えなければならぬ。

第一段落からずつと、「遜」と「敏」がテーマになっている。孔子は、自分は聖人なわけではないと言い、「我生まれながらにして之を知る者に非ず（「私は生まれながらに物事を知っている人間ではない）」と言った。これは「遜」といえる。しかし『論語』述而篇では、その言葉に続けて、「古を好み、敏にして以て之を求めたる者なり（「昔の聖人の学を好み、積極的に努力してこれを探究してきた人間なのだ）」と言った。これは「敏」で、「遜」もアリだが、「敏」のほうを見るべきである、といった文脈である。

(i)の書き下し文であるが、まず、前半に2対3の配分があることに着眼したい。「也」を、①・②は断定の「なり」、③・④・⑤は、「……のときにあたっては」のような意味の助字の「や」に読んでいい。この位置で断定の「なり」は不自然で、「なり」なら、一般的にはこの位置でいったん「。」であろう。③・④・⑤の後半の読み方は、置き字「於」に、③のような比較の意や、⑤のような受身の対象を示す意もあるので、いずれも可能である。①・②の後半についても同様である。「曷・乎」については、①・④・⑤は反語に、②・③は疑問に読んでいい。

(ii)は解釈である。書き下し文との組合せとしては、(i)の①と(ii)の②、(i)の②と(ii)の④、(i)の③と(ii)の⑤、(i)の④と(ii)の③、(i)の⑤と(ii)の①となる。解釈の選択肢を讀んでみると、「於」の用法を比較や受身にとっている①・②・⑤がおかしいことには気がつくであろう。「敏を」でなくてはならない。そこで、さきほど考察した文脈をもう一度思い出すと、孔子は「敏」を貴んだのであるから、④では逆で、③の「どうして『敏』を貴ばなかったことがあるか（「いや、『敏』を貴んだのである）」でなくてはならないことになる。「曷・乎」は反語形であった。

正解 (i)  32  ④ (ii)  33  ③ (各5点)

#### 問4 標準

傍線部C「豈真不敏者乎」とあるが、筆者がそのように述べる理由の説明として最も適当なものを選べ。

傍線部の理由説明の問題。

傍線部C「豈に真に敏ならざる者ならんや」そのものは、「どうして真に『敏』でない者であろうか、いや、真に『敏』である者である」という意味である。「豈・乎（あに……んや）」は反語形である。

この傍線部の主語は、「回」と「参」である。つまり、顔回と曾参は二人とも「敏」なる者だということを言っているのである。

これも、この傍線部に至る文脈を見てみよう。かつて、孔子が二人に「仁と孝」について語ったとあるが、これについては、後に「回の仁、参の孝」とあるから、顔回は「仁」について、曾参は「孝」について、ということなのであろう。二人は「自ら敏ならず」と言った。その「遜」なる態

度はよしと言うべきであろう。しかし、実際には、「回の仁・参の孝も、三千の徒、未だ之に先ずること或る能はず」、つまり、三千の弟子たちは誰もこの二人を越えることはできていないのである。二人は、みずからは「敏」ではないと言いつつ、実際は誰よりも「敏」なのである。この文脈をすべてカバーしているのは、①である。

②は、「孔子の教えを忠実に守って」が文中になく、「他の三千の弟子たち以上に『遜』」が間違いである。

③・④は、主体を孔子にして説明している時点でズレている。

⑤は、「孔子の『古を好む』考えに対しては『遜』であった」が間違い。そうかもしれないが。文中に根拠になる箇所がない。

正解 34 ① (6点)

### 問5 やや難

空欄Ⅰ・Ⅱ・Ⅲに入る語の組合せとして最も適当なものを選べ。

本文の主旨・文脈をとらえる空欄補充問題。

第二段落の、孔子の言葉や、顔回・曾参の話から、「遜」はよいことではあるが、「敏」のほうが大切だという趣旨が読みとれば、この空欄補充問題はそれほど難解ではないが、「遜」「敏」の意味がおぼろげなままだと、どう考えてよいのかわかりにくい問題であろう。

「遜」は、「謙遜」という熟語のように、へりくだり、ひかえめであること。第一段落の言葉でいえば「謙退」(問2の選択肢では「謙虚」と解釈している)で、「虚しくして人に受け」ること、つまり、心を素直にして人に教えを受けることである。「敏」は、「機敏」「敏速」「鋭敏」などの熟語が思いつくかぶであるが、やはり第一段落の言葉でいえば、「勤めて以て己を励」まして、つまり自分にむち打って努力し、「進修」(問2の選択肢では「進んで学ぼう」とすることと解釈している)「することである。」

まず、「Ⅰ」は美德と雖も、然れども必ず「Ⅱ」ならば則ち功有り」であるが、これは、「Ⅰ」が「遜」、「Ⅱ」が「敏」であろう。「然れども」と逆接になっているから、「Ⅰ」と「Ⅱ」に入るものは違うものでなくてはならない。で、結局どちらが、「学を為すの道」において「尤も」「重んずべき」のかといえ、Ⅲは「敏」であろう。本文全体の趣旨の問題と言つてよい。

正解 35 ⑤ (5点)

## 問6 標準・難

この文章の(i)構成・(ii)筆者の意図についての説明として最も適当なものを、それぞれ一つずつ選べ。

本文全体の構成と筆者の意図の問題。問題文全体の構成を問う問題は二〇〇八年以来である。

まず、(i)の構成である。

第一段落では、『書経』説命篇で傅説が殷王の武丁に答えたという、本論の主題となる「遜」と「敏」の一語をあげて、傍線部Aで、「遜とは……」「敏とは……」と定義づけをしている。①は「定義付け」で、これが最も適当であろう。②の「経典による権威付け」は、「権威付け」が不適当。③の「筆者自身の見解(見方。意見)」は違う。④の「太古の時代における認識」も、⑤の「出典確認」もまったくの間違いである。

第二段落では、「遜」と「敏」についての、孔子・顔回・曾子の話をあげている。これも、①の「その言葉を具体的に実践した歴史上の人物の例」は正しい。②の「聖人の言葉による補強」はややズレているし、顔回・曾子のことがカバーできていない。③は、孔子や顔回などの「見解」をのべているのではないから、「儒家思想家一般の見解」は間違っている。④の「孔子の時代における認識」も、⑤の「思想上の対立点」もまったくの間違いである。

第三段落では、「遜」も美德ではあるが、「敏」のほうが「学を為すの道」においては重んずべきであるという、筆者自身の考え方を述べている。

①の「筆者自身の見解」は正しい。②「社会的通念への批判」、③「筆者自身の見解の優越性の主張」、④「筆者の時代における認識」、⑤「読者への問題提起」、いずれも間違いである。

(ii)の筆者の意図は、「意図」という設問の意図がややわかりにくいだが、選択肢の内容から考えて、本文全体の趣旨(言いたいこと)を問うているのであろう。ということ、つまり、学問をするには、「遜」と「敏」が必要なのではあるが、「遜」よりも「敏」がより大切である、ということである。④の「みずから能動的に努力すること」が「敏」に、「人の教えを受け入れ」るが「遜」、第一段落の「虚しくして人に受け」に相当する。

①・②・③・⑤の選択肢の言っていることも、それぞれ、それ自体は間違ったことではなくそのとおりなのであるが、本文で筆者自身が示している見解とは合致しない。①の「書物」の「熟読」も、「人の話によく耳を傾け」よも、「効率的」な「行動」も、本文にはまったくない。②の「自己中心的な先入観を捨て」よも、「他者の意見をよく聞」けも、同じである。③は、自分を卑下しないほうがよいについては、第三段落冒頭にややさわるが、全体としてはやはり本文に根拠がない。⑤も同様である。とくに「対話や議論」が大切などは、どこにも書かれていない。

正解 (i) 36 ① (ii) 37 ④ (各7点)